人間の安全保障

開発金融研究所長
丹呉　圭一

冷戦が崩壊し、GLOBALIZATIONが進展していく中で、これまでになかった色々の現象が現れてきた。

その第１は、従来国家が責任を持って解決すべき問題であった政治不安定、貧困と失業、不法移民、医療保健の安全、食品食料の安全、麻薬や密輸・武器流出による治安の悪化、依然として残っている偏見と差別、環境悪化、等の問題が個人の日常生活レベルの問題となってきていることである。

第２に、「9.11」以降、テロは地球上のどこか特定の地域にのみ起こる現象ではなくなったことである。民族・宗教・集団・グループを政治的・経済的に疎外し、その孤立化を進めることが、現状（改革）への絶望感を生み出し、極端なIDENTITYを強調することとなり、これがテロの原因の一つとも言われる。この政治的・経済的疎外や孤立化の進展は開発途上国にだけ起こっていることではない。先進国を含む全世界のすべての地域で起こりうる可能性をもつ事柄である。

第３に、多くの紛争がかつての国家間の戦争という形式から国内紛争や内戦の形をとり、これらの紛争や内戦の多くが開発途上国で起こっていることである。紛争の共通点は、民族的・宗教的対立、多数者支配対少数者抵抗の形であらわれ、その影響は、弱者・権力をもたない層（女性・子供）の自由や基本的人権を脅かし、また伝染病の蔓延等社会的環境的生活面で顕著に表れている。

こうした、人間の基本的生存権を脅かす問題に対して、国連のKOFI　ANNAN事務総長は「恐怖からの自由・欠乏からの自由」という表現で、「人間の安全保障」の重要性を訴えた。この人間の安全保障という言葉についてはその曖昧さと不明瞭さを指摘する者も多いが、その今日的意義を否定する者はいない。

この「人間の安全保障」とは次のように言い得るであろう。

「①GLOBALIZATIONと相互依存関係が進展する中で、顕在化してきた新しい脅威に対して、人間自身が身を守るための力をつけるというPROCESSを通じて、包括的な対応のあり方を提示しようとする考え。

②国家と個人の間を繋ぐ市民社会やCOMMUNITYに焦点をあて、人々の保護とEMPOWERMENTを強化し、従来の「国家の安全保障」を補完することにより、より幅広い脅威に対応しようとする考え。

③これまで国際社会には「人権」や「人間開発」等の概念が存在しているが、それらを統合し、また両立させる考え。」

現在、開発途上国の多くで紛争が起こり、その解決に国際機関を始め、多くの国家・政府・団体・NGO・そして個人が係ってきた。その誰もがこうした紛争が二度と起こらないようにするために何をするべきかについて思いをはせ、いろいろな考えや意見交換を通じ国際的な枠組みつくりを進めている。紛争が起これば、紛争を（外から）終結させ、平和構築をし、復興支援をする。いつもこうした国際的な平和構築と復興支援行動は活動として高く評価されているが、実は、その裏には紛争地域の人々の悲惨な生活があることを忘れるわけにはいかない。こうした紛争はなぜ繰り返し起こるのか。その原因はどこにあるのか。

一部の人々は、開発途上国の遅れた政治的・経済的・社会的構造を指摘し、選挙制度・自由経済システム、教育・保健・医療制度の整備など、先進国の国家運営のやり方を導入しようとする。しかし、先進国のやり方はその過去の歴史を見れば分かるように、多くの血と汗の結果として築き上げたものであり、そのやり方も国ごとに異なる。

また一部の人は先進国の国家運営のやり方そのものではなく、開発途上国の歴史的・民族的・宗教的特徴と両立させながら、紛争の原因となる普遍的な要素を抽出し、これに焦点を当てようとする。その一つとして指摘されるのが「差別」である。

「差別」には、「差別する側」があり、「差別する方法」がある。一般的に「差別する側の論理」とは「多数による少数の差別」であり、それによる「利益の独占的かつ構造的な確保」である。また、その「差別する方法」は伝統的には「力による」ものであるが、「力による差別」は「物理的な力・暴力的な力」から「数や量による力・多数による力」に形を変えてきている。しかし、結果として「少数の差別」にどれほどの変化があったろうか。一般的に、いかなる国家・社会・集団・組織でも、「多数の論理・やり方」が「少数意見の無視・少数者は多数者のやり方にしたがえ」という「強者の論理＝抑圧」に変わる時、それらの集団は紛争という要素を将来的に抱え込むこととなる。

「人間の安全保障」は「新しい概念」であるが、そこで主張されている「個人の生存と尊厳」については、古代ギリシャ以来多くが語られてきた。しかし、その多くが実行されてきたのだろうか。もし、ほんのわずかしか実行されてこなかったとしたら、その原因は何処にあるのだろうか。

これから我々が一方的に、開発途上国の紛争を対岸の問題と考えていけば、GLOBALIZATIONの中で、紛争や争いの原因の一つである「多数による抑圧」「差別」の問題を正確に捉えることは出来ないであろう。GLOBALIZATIONの中で考えるべき「多数による抑圧」「差別」の問題は、先進国・開発途上国を問わず、国家・市民社会・集団・組織・個人等のレベルで、それらを生み出してきた国家や社会、組織のシステム、規則・ルールをどう変えていくかという問題でもある。